

(始良郡始良町西餅田小瀬戸)

位置と環境

遺跡は海岸線から約2kmの別府川と思川によって形成された狭い沖積平野に、北側から延びた標高約11mの微高地の末端近くにあり、役場から北西側へ約1kmに位置する。

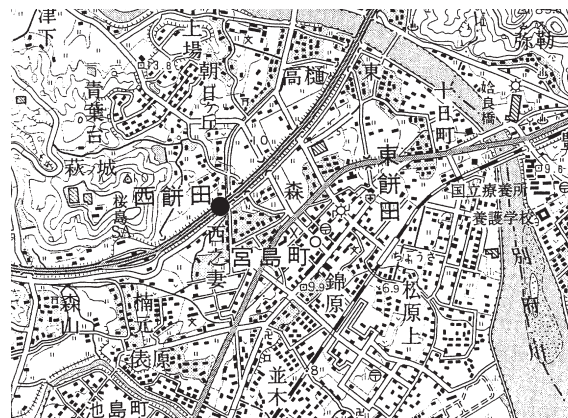
遺跡の東側は用水路を隔てて約1mの比高差をもって西ノ妻の人家に続き、他の三方は遺跡とほぼ同じ高さで水田地帯となり、近年では大型団地や個人住宅など宅地化が進んでいる。

調査の経緯

本遺跡は九州縦貫自動車道建設に伴って日本道路公団鹿児島工事事務所から調査依頼を受けた県教育委員会により、昭和43年(1968)・44年に分布調査を行って発見された古代の遺跡である。

調査は昭和46年8月10日から11月2日にかけて行われた。

その結果、奈良時代末期から平安時代にかけての生活跡が主体で、緑釉陶器や墨書土器など地方官衛等を想起させるような注目される遺物の出土があった。また、縄文時代や弥生時代の遺物も散見された。



第1図 小瀬戸遺跡の位置

調査の対象面積は約3,050㎡である。

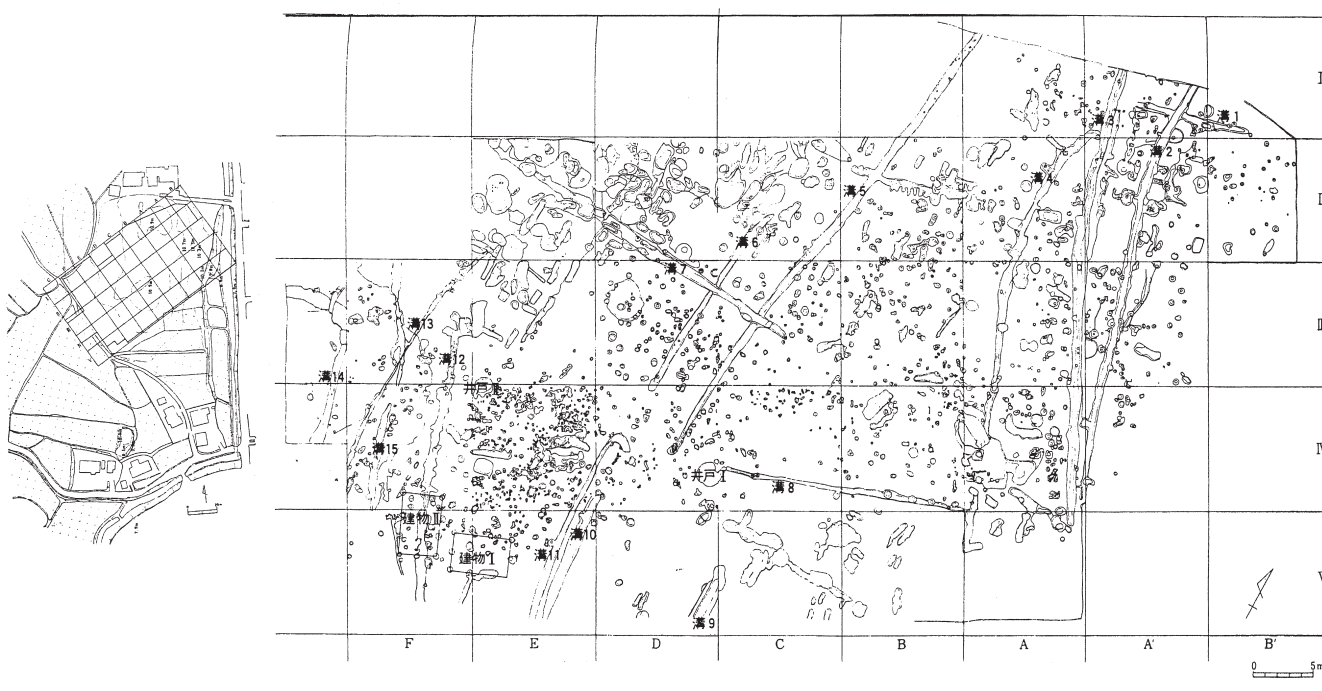
遺構と遺物

縄文時代や弥生時代の遺構は、確認されていないが、縄文時代早期の前平式土器、縄文時代前期の深浦式土器、縄文時代晩期の夜臼式土器などの土器や石鏃・石匙・砥石などの石器が出土している。

一方、弥生時代の遺物は中期該当の須玖式土器と磨製石鏃などの遺物がみられる。

主体をなすものは歴史時代で、掘立柱建物跡2棟・溝状遺構15条・井戸跡2基などをはじめ多数の柱穴を検出している。

柱穴は調査区のほとんどで検出されて、土師器、



第2図 小瀬戸遺跡検出遺構配置図

瓦、礫等を包蔵するものもあった。

これらの柱穴から復元できた掘立柱建物跡は、2棟にすぎなかったが、検出した多数の柱穴から推察すると相当数の建物跡と、数次にわたる建て替えがあったものと推定されている。

溝状遺構は15条が検出され、東西に走るものが3条、南北に走るものが12条あり、圧倒的に南北に走る溝が多い。

これらの溝状遺構は掘立柱建物跡が区画されたと理解できるものではなく、生活跡としての復元は困難であった。また、溝状遺構の新旧関係については判明できるものも6条と少なかった。

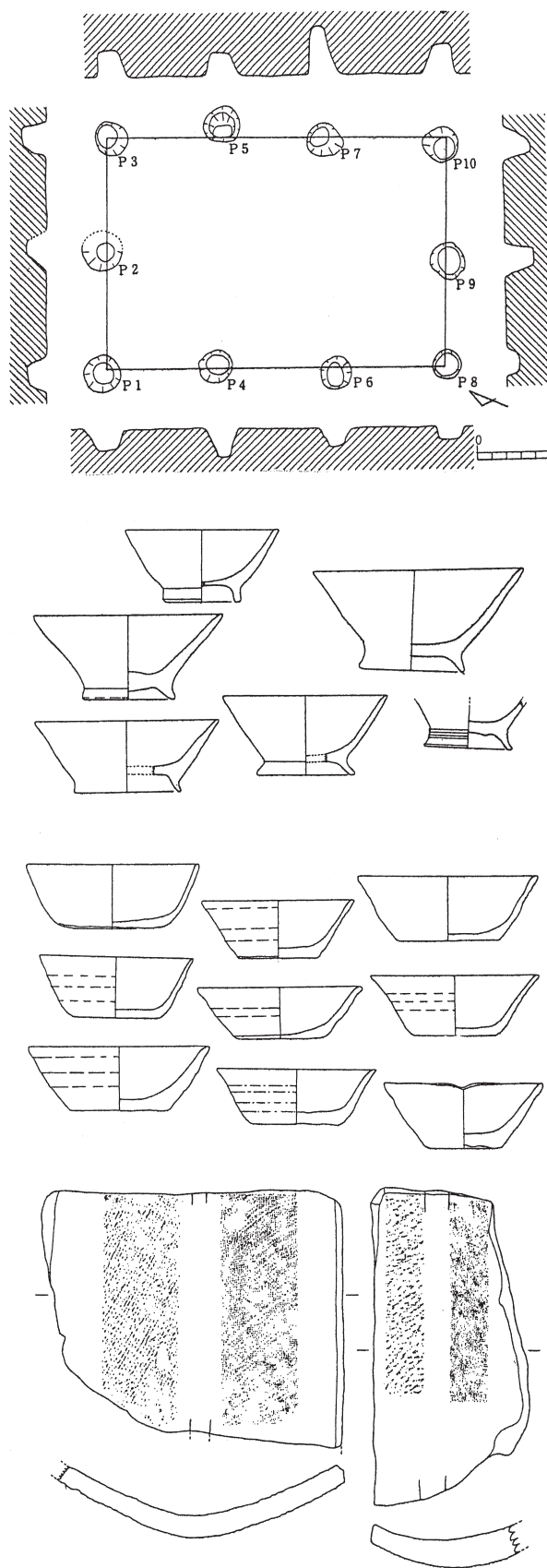
なお、特筆される遺構には井戸跡2基がある。

このうち1基には、井戸枳、木製容器をはじめ、土師器、ヘラ書きで「仲家」と刻書した土器、表面が布目・裏面が太目縄目タタキで、縁は面どりをした平瓦の完形品や、細目縄目タタキの丸瓦などの小片が出土している。

このほか、須恵器は瓶の小片や罎、土師器の埴、坏灯明皿、内黒土師器、蛇の目高台をもつ越州窯系の青磁や荊州窯系の白磁、礫なども見られる。



写真1 小瀬戸遺跡検出遺構遠景及び井戸



第3図小瀬戸遺跡検出遺構図及び出土遺物

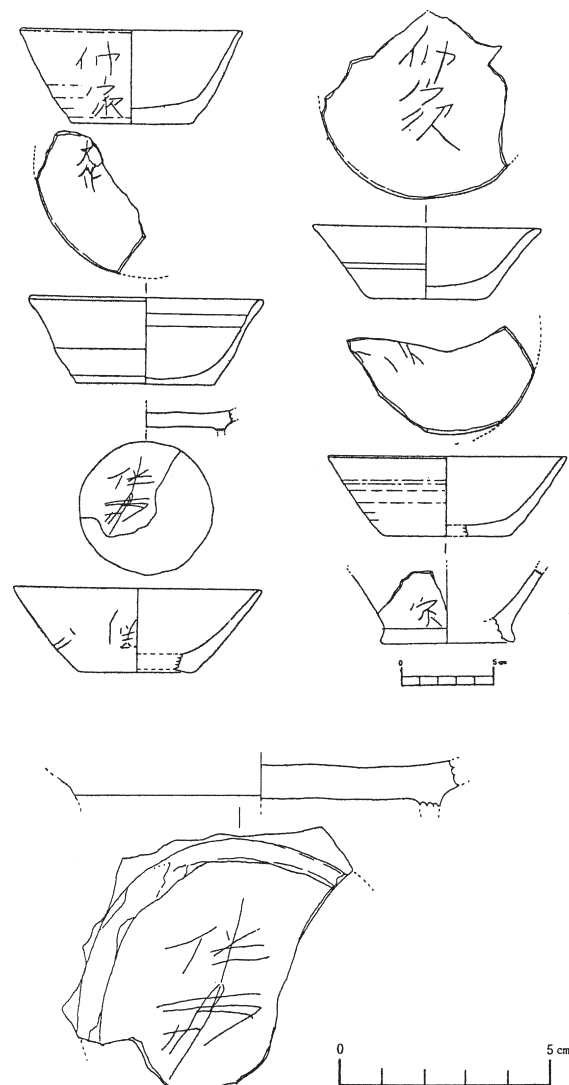
さらに、種子などの検出もあり、ヒョウタンやモモなどは当時の食生活面的一端を窺い知ることができる。また、イチイガシ、ウメ、ヤブニツケイなどの種子からは遺跡周辺の植生再現の一助や、自然環境の復元材料となる。

歴史時代の遺物には土師器瓦器質土器、内黒土師器、墨書土器、刻書土器、須恵器、越州窯系・竜泉窯系の青磁、荊州窯系の白磁、土錘、瓦、水霊祭祀に関わることの事例の多い土馬など多種多様のものがある。

本遺跡で多量に出土した遺物は土師器である。その器種には口縁部がくの字状に外反し、長胴形の胴部をもつ甕形土器、高台を有するものを総称し、遺跡全域で出土している埴形土器、鉢形土器、底部がへう起しの坏形土器などがあり、このほか、鉢形土器・皿形土器・蓋形土器などはわずかな出土である。

これらの遺物のうち、「仲家」「大伴」「原」「雄」「仲」「利」等の墨書土器や刻書土器が注目されたほか、緑釉陶器には「伴家」という針書するものが出土し、衆目の的となった。このことは、本遺跡が単なる古代における生活跡というだけでなく、地方官衙等を想起させる古代地方政治の一遺跡とも考えられるであろう。

そのほか、土器はすり鉢、羽釜、天目、ふいご口、



第5図 小瀬戸遺跡出土遺物（刻書土器）

薩摩焼や滑石製石鍋などの出土があった。

特徴

井戸の検出は当時としては本県で初めての発見例で、最初の遺跡である。

古代の遺物包含層から出土した多数の柱穴遺構の復元は古代官衙の存在を含めて課題となっている。

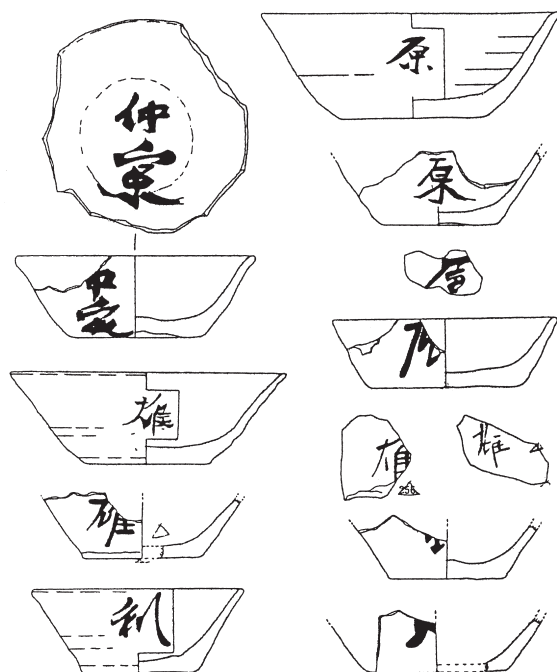
資料の所在

出土遺物は、県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1982「小瀬戸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』19

(立神次郎)



第4図 小瀬戸遺跡 出土遺物（墨書土器）